

## 「ヨハネ：気質と性格は変わるのか？」

私達は誰しもそれぞれ「性格」を持っています。ある人は「社交的な性格」と呼ばれ、ある人は「もの静かな性格」と言われます。「性格」と同じように使われる言葉として「気質」という言葉があります。「性格」と「気質」の違いは何なのでしょう。調べてみますとそこには違いがあるようです。

すなわち「気質」とは私達が先天的にもっているもので、それは何かしらの刺激を受けた時にする私達の反応だそうです。何か起きた時にとっさにどんな言動をするのか、そこから見えてくるのがその人の気質で、英語ではテンパーメント (Temperament) と呼ばれます。そして「性格」とはこの「先天的な気質」に加えて「後天的な感情や意志」などが加わったもので英語ではキャラクター (Character)、パーソナリティー (Personality) と呼ばれます。

盲導犬となる犬は中型犬のラブラドル・レトリバー、あるいはゴールデン・レトリバーが主になります。彼らの気質が穏やかで、飼い主に忠実だからです。私達はポメラニアンの盲導犬を見たことがありません。また警察犬となる犬は賢く、機敏、かつ忠実で、主にそれはジャーマン・シェパードです。私達はチワワの警察犬を見たことがありません。それはレトリバーとシェパードという犬が生まれながらに持ち合わせている気質が盲導犬、警察犬の役割に適しているからです。その気質の上に彼らが後天的に得た性格が加わり、それぞれの犬の個性となります。

同じように私達一人一人にも気質があり、そして性格があります。この気質と性格が互いに違いますがゆえに私達、人間社会には色々なドラマが生まれます。そして、言うまでもなくイエス・キリストの弟子達にもそれぞれ気質と性格がありました。

イエス・キリストは宣教活動を始めるとあたり12人の弟子を選び、彼らと三年半、寝食を共にし、彼らを訓練しました。先週、お話ししましたようにその中にはリーダー格のペテロという男がいました。ペテロは情熱的な男で、その情熱の方向性を誤り、度々、問題を引き起こしました。

また弟子の中には熱心党のシモンという男もいました。熱心党とはローマからユダヤの自治独立を勝ち取るために手段を選ばずにその目的を遂行しようという過激組織でした。暴動時の殺人で刑に処せられながらもイエス様の身代わりで恩赦を受けたあのバラバもこの熱心党員であったと言われていています。

イエス様を裏切ったユダは「イスカリオテのユダ」と呼ばれていました。この「イスカリオテ」という彼の呼称は「カリオテ」という地名をあらわすとか「刺客：Assassin」を意味する言葉ではないかと言われていています。仮にその意味を刺客としますのなら、シモンが属していた熱心党員はいつも懐に短刀を隠し持っていたといえますから、このユダも熱心党員であったのではないかとされています。今日で言うなら懐に短刀を隠し

持っているテロリストのような男達がイエスの12弟子の中にいたということは驚きです。

これらから分かりますようにペテロ、シモン、ユダ共に彼らは情熱的な気質をもっていました。情熱的であるということはとても大切なことです。情熱なくして事は起きないからです。しかし、その気質ゆえに彼らは物事に対して直ぐに熱く反応をするのですが、そこに彼らの感情や意思が反映しますと、その情熱の方向性を誤り、度々、問題を引き起こしました。そうです、彼らはその気質を正しく用いることができずにいたのです。

これらの人達以外に、他の弟子達の気質と性格もあげることができますが、今日はその中で12弟子の中で一番、若かったであろうヨハネに特に注目したいと思います。ヨハネにはもともと気の短い気質があり、その気質ゆえに頭に血がのぼると彼の感情や意思はそれを抑えられず、度々、爆発しました。

ヨハネはガリラヤ湖畔で兄弟ヤコブと共に網を繕っている時にイエス様に声をかけられると、すぐに舟と家族を置いて12弟子に加わり、イエス様に従っていきました（マタイ4章21節、22節）。ヨハネは弟子達の間で一番、年齢の若い男でしたが、「雷の子」を意味する「ボアネルゲ」と呼ばれていました。先のマタイの「イスカリオテ」もそうですが、ニックネームとはその人の人となりを表します。私達が「雷の子」というニックネームから想像するヨハネの人となりはどのようなものでしょか。

南カリフォルニアでも年に数回、雷光と音を聞くことがあります。時にはすぐ側で雷光が天地を切り裂くような様子を目的することがあります。あの天地を引き裂くような雷光の子と呼ばれたヨハネがどんな人間であったか私達はだいたい想像できます。ヨハネは年長者である他の弟子がそこにいようが、否、イエス様の前でも度々、雷が天地を引き裂くような激情を爆発させていたのでしょう。

ある時、イエス様一行が旅をしていた時、途中、サマリア人が住む町を通過したのですが、その時に彼らがイエス様を歓迎しませんでした。このことに対して雷の子ヨハネは激怒してイエス様にこう言ったのです。

『主よ、いかがでしょう。彼らを焼き払ってしまうように、天から火を呼び求めましょうか？』（ルカ9章54節）自分達を受け入れないというその理由だけで、彼は天から火をおこして彼らを焼き払ってしまいたいというのです。彼はサマリア人に対して完全に頭に血が上っていました。「彼らを焼き払いましょう」とは何とも激しい言葉です。

またルカ9章49節を見ますとヨハネがイエス様に「先生、わたしたちはある人が、あなたの名前を使って悪霊を追い出しているのを見ましたが、その人は私たちの仲間ではないので止めさせました」と言っています。

ヨハネはある所でイエス様の名前を使って悪霊を追い出している人達を見て、頭に血がのぼり、彼らに詰め寄り「やいやいお前ら、誰の許可があって、勝手に俺たちの親分の名前を使っているんだい。やめろ、やめろ、今すぐやめろ」と彼らに強く迫ったのでしよう。さらりと書かれていますが、この時のヨハネもそうとうに激しかったことでしょう。

瞬間湯沸かし器のごとく、すぐに頭に血がのぼり、一度、そうなったら誰も止められないような気質をもったこんなヨハネでしたがイエス・キリストと出会い、その弟子となって以来、イエス・キリストの言動が本当に彼を惹きつけたのでしよう。彼は他の誰よりもイエスの近くにいることを自らに心がけ、イエス様から離れることがありませんでした。ペテロの家にいる時も（マルコ1章29節）、会堂司の娘がよみがえった時も（マルコ5章37節）、変貌の山（マルコ9章2節）とオリブ山（マルコ13章3節）とゲッセマネ（マルコ14章33節）においてもヨハネは苦悶するイエス様と共にその場に居合わせました。彼は雷の子でしたが、イエス様から離れることなく、その言動を心に焼きつけました。

イエス様が十字架にかかる最後の晩餐の席上では主の御胸に寄り添って席に着きました（ヨハネ13章23節、25節）。

質問：ヨハネ13章23節と25節だけか、23, 24, 25を全て引用しますか？

イエス様が捕えられた時、他の弟子達は皆、散り散りに逃げましたがヨハネだけはイエス様を離れずに（ヨハネ18章15節）、母マリアと共に弟子の中で唯一、十字架の下でイエス様の姿を最期まで見届け、イエス様から母マリアのことを託されました（ヨハネ19章26節、27節）。

ヨハネは明らかに激しやすい気質をもっていました。その気質を持ったまま、彼は「このお方こそ」と思ったイエス様にひたすらついていく決意をしていたのです。そして、この決意は後に彼の性格となりました。そう、彼は常に物事を注意深く観察する性格を獲得したのです。、かつてあの偉大な預言者イザヤはイエス様の姿を預言して「かわいた土から出る根のように、見るべき姿がなく、威厳もない」（イザヤ53章2節）

質問：イザヤ53章2節は、

「彼は主の前に若木のように、かわいた土から出る根のように育った。彼にはわれわれの見るべき姿がなく、威厳もなく、われわれの慕うべき美しさもない。」と、もう少し長くなるのですが、PPには、聖句を全文のせても大丈夫ですか？

と世の人達のイエス様に対する視点を預言しましたがヨハネは「わたしたちはそわしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた」（ヨハネ1章14節）とイエス様の本質的な姿を見極めていました。

イエス様のよみがえりの朝、彼はペテロと共に主の墓にかけて行き、ペテロが猪突猛進、墓穴の中に駆け込んだ時にも、ヨハネは墓に入ることはなく墓の中を観察していました（ヨハネ20章3節－6節）。

質問：ヨハネ20章3節－6節は、どうしても1ページでは全文収まらないのですが、それでも大丈夫ですか？

イエス様がガリラヤ湖の岸に立っておられた時、だれよりも先に「あれは主だ」とイエス様を見極めて叫んだのもヨハネでした（ヨハネ21章7節）。このようにしっかりと物事を見極めることができたヨハネであったゆえに、彼は後年、パトモス島において幾千年の歴史を見通して、主の再臨の栄光を拝し、そのことをヨハネ黙示録に記し、後世に書き残すという大役を神様から授かったのでしょう。

また12弟子の中で自分のことを「イエスの愛された弟子」（ヨハネ21章20節）と呼んだのは彼だけでした。愛されているという感受性を彼は持ち合わせ、そこに生き続け、神様はその彼を御手の中でかたち作られたのです。

ヨハネは十字架にかけられたイエス様の一部始終を十字架の下、間近に見ていました。釘づけにされたイエス様から語られた十字架上の七つの言葉を聞き、イエス様から直々に母マリアを託されたようにイエス様と直接会話ができるようなところにいたにちがありません。十字架上で「父よ、彼らをお許してください。彼らは何をしているのか分からずにいるのです」（ルカ23章34節）と言われた言葉やイエス様の横の十字架につけられた強盗に向かって「あなたは今日、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」（ルカ23章43節）という言葉、全てをヨハネは十字架の側で見聞きしたことでしょう。ヨハネが書き記したヨハネ伝だけが、イエス様が十字架上で言われた、聞き逃してしまうような「わたしは乾く」（ヨハネ19章28節）と「すべてが終わった」（ヨハネ19章30節）という短い言葉を記録しています。そう、彼はその言葉を人づてではなくイエス様から直接聞いたのです。

これらの事があつたずっと後にヨハネは「ヨハネ第一の手紙」を書いたのですが、そこには非常に不思議なことが書かれています「主は私たちのために命を捨てて下さった。それによって、私たちは愛ということを知った（口語訳）。私たちに愛が分かったのです（新改訳）」（1ヨハネ3章16節）

不思議な言葉です。ヨハネはここで「それにより愛ということを知った、分かった」というのです。「それにより」とは「主はわたしたちのために命を捨ててくださった」ということです。そのことにより、彼は愛ということを知り、愛が分かったというのです。

そうです、「このこと」とは彼が見上げた十字架のイエス様のお姿です。目の前に無残な姿で十字架にかかっているイエス様がいる。つい数時間前までエルサレムの二階座敷で自分の隣に座っておられたお方。自分の目の前でパンをさき、ブドウ酒を注ぐ姿を間近に見ていた、その手に今は釘が打ち込まれている。なぜ、このお方はこのような十字架刑にかけられたのか。彼は知ったのです。このお方は自分のために十字架にかかったのだということ。そのことが分かった時、彼は生まれてはじめて愛というものを知った、愛とは何かが分かったということです。

かつてヨハネの母親がイエス様のもとにきてこんなことを話したことがありました。「その時、ゼベダイの子らの母が、その子らと一緒にイエスのもとにきてひざまずき、何事かをお願いした。そこでイエスは彼女に言われた。何をしてほしいのか。彼女は言った、わたしのこの二人の息子を、あなたの御国で一人はあはあなたの右に、一人は左に座れるようにお言葉をください」（マタイ20章20節－24節）。

そうです、ヨハネの母はイエス様に言いました。我が愛する子達をあなたの一番弟子、二番弟子としていただきけないかと。明らかにこれは他の弟子たちを出し抜いたもので褒められことではありませんが、正直な親心でありましょう。どんなにかこの母やヨハネを愛していたことでしょうか。ヨハネには子のために盲目になってしまうような優しい母がいました。また彼にはいつも行動を共にする兄弟ヤコブもいましたし、父ゼベダイは二人の息子がイエスに従って家を出ていく時にも（マタイ4章21節－22節）、とがめることをしないような息子に信頼を置く父親だったようです。聖書によりますとヨハネの家には雇人があり（マルコ1章19節、20節）、彼は大祭司の知り合いであり（ヨハネ18章16節）、相当に裕福であり、父も町の名士であったようです。ヨハネはこのような家族の愛と恩恵を受けて育ったことでしょうか。もともと激やすい彼の気質に加え、親の溺愛ゆえにそれが咎められることなく育ったことゆえの性格が雷の子と呼ばれた理由だったのかもしれない。

その彼が言うのです「私は愛を知った、愛が分かった」と！このことが分かった時に彼は「雷の子」というニックネームを返上したのでしょうか。自分は主から愛されているのだということを知った時に、その愛が彼の内に満ち溢れ、それが留めえないので、その手紙に何度も「愛」を書き記したのでしょうか。ヨハネは変わりました。イエス様の愛を知ったからです。その愛が彼の心に満ちたからです。ゆえに先ほど読みましたヨハネが晩年に書き残したと言われているヨハネ第一の手紙は「愛の書」と呼ばれ、この手紙の3、4章だけで実に「47回」も愛という言葉が記されているのです。まさしく口を開けば彼は愛を語る男に変わったのです。

人は人を努めて愛そうとします。しかし、実際のところ、それは難しいのです。愛の本質は愛されてはじめて、愛することができるからです。愛はその時々自分で生産するものではなく、どうかこうにか内から自分で絞り出すものではなく、「愛する」前に「愛されている」という愛が溢れ出てくるものだからです。ルカ伝においてイエスが言

われているとおりです。『心からあふれ出ることを、口が語るものである』（ルカ6章45節）。

ヨハネの気質と性格は雷の子でした。しかし、その雷の子がイエス・キリストの弟子となり、この雷の子はイエス・キリストの言動を一つももらさないように常にイエスの側にいて、その姿を心に焼きつけました。そのようにしてイエスと共に過ごすうちに彼の気質は変えられ、それゆえに彼の性格も変えられていったのです。イエス様の愛が雷の子と呼ばれたヨハネの気質と性格を全く変えてしまったのです。

伝説によれば後にヨハネはイエス様から言づけられたようにイエス様の母マリアと共にエペソで過ごしたといえます。かつては一番若かった彼も老年となりました。かつては雷の子であった彼も、自分の弟子たちに手を引かれながら集会に来るようになりました。彼はそんな集まりに出るとは「子達よ、互いに愛し合いなさい」とだけ繰り返し言ったといえます。「天から火を！」と言っていたかつての雷の子はイエスの愛に触れ、愛しか語らない人となりました。ヨハネはイエスとの出会いによって愛の使徒に変えられました。私たちの人生にも色々な出会いがあることでしょう。しかし、このイエスとの出会いに勝るものはありません。

ヨハネは第一ヨハネ4章10節で言いました「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪の贖いの供え物として御子をお遣わしになった。ここに愛がある」ここに愛があるのです。愛という言葉の価値が暴落しているようなこの時代にあっても、あの2000年前のカルバリの愛は今もその輝きが失われることはないのです。

あの人は自分にいいことをしてくれる。親切だ、優しい人だというようなものではない、自らの命を投げ出すまでに私たちを愛して下さったキリストの愛がここにあります。医者が患者のからだを診察し、その患者に必要な薬を処方するように、私達が自分の心と真摯に向き合う時に、私達が本当に必要としているのは、このキリストの愛なのだということが分かります。言い方を変えれば、私達はこのような類の愛を受けることなく、日々、暮らしているのです。誰もがこのキリストの愛を必要としています。

今日のメッセージのタイトルは「気質と性格は変わるのか」というものです。結論を言います。気質と性格はイエス・キリストにあって変わります。何が私達の気質と性格を変えるのでしょうか。キリストの愛が私達の気質と性格を変えるのです。あなたはこのことを信じますか。

イエス様が12弟子を選ぶにあたり、何をなさったかということルカは書き残しています。12このころ、イエスは祈るために山へ行き、夜を徹して神に祈られた。13夜が明けると、弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を選び出し、これに使徒という名を

お与えになった。14 すなわち、ペテロとも呼ばれたシモンとその兄弟アンデレ、ヤコブとヨハネ・・・」（ルカ6章12節－16節）。

イエスの12弟子は皆、志願してその弟子となったのではありません。ペテロも熱心党のシモンもイスカリオテのユダも、そして雷の子ヨハネもイエスに選ばれて弟子となったのです。イエス様は彼らの気質と性格を知りつつも、そのために夜を徹して神に祈られ、夜が明け、その所から立ち上がる時にイエス様の心には彼らがいたのです。そうです、粗削りの気質を持ち、その気質の使い方を知らないゆえに失敗を繰り返した男達です。しかし、彼らはイエスの愛により、その気質と性格が変えられたのです。

人間的に見れば彼ら以上によき気質と性格をもった有能な人達はたくさんいたことでしょう。素材ということで考えればそれは決して最善とは言い難い男達でした。しかし、イエス様の目から見れば彼らは可能性に満ちた男達でした。ペテロ、ユダ、シモン、ヨハネの情熱の出どころと、矛先が変わる時に、何が起こるかということを知りながら、イエス様はご存知でした。イエス様は荒削りの素材をその御手の中で整え、愛の使徒、ヨハネを作り上げ、弟子達も変えられました。褒めたたえられるのはヨハネではなく、弟子ではなく、主イエスが人を造り変えたそのみわざなのです。

主にある皆さん、私達の気質と性格はいかがでしょうか。そのことにおいて完璧な人はいないでしょう。今日、お話ししましたことで分かりますことは、イエス様は弟子達の欠点と思われるところを引き延ばし、そのことによって彼らは神の栄光をあらわしていく人生へと導かれていきました。あなたの気質と性格を十二分に知りながら、あなたのために夜を徹して祈っておられる方がいるということを知る時に、そのキリストの私達に対するパッションに皆さんの心は動かされませんか。私達がこの人生で作り上げる唯一の作品、そう、「自分」という作品を神の御手の中で作り上げていただきませんか。お祈りしましょう。